

映画に 宛てた ラブレター



2014年
2月号

天見谷行人

ご挨拶

読者の皆様こんにちわ。いつもご愛読ありがとうございます。私事で恐縮ですが、1月下旬から、2月初めにかけて、耳に出来た腫れ物を取り除くため、入院手術を受けました。そのため、今年1月に鑑賞できた映画は、3本だけと言う結果になってしまいました。これでは読者の皆様も物足りないであろう、大変申し訳ない、と思いました。

そこで、いつかは一冊の電子書籍にまとめてみようかと計画しておりました、映画レビュー集「映画名品コレクション」（仮題）の中から、とっておきの”蔵出し”作品「野のユリ」をご紹介しますと思います。今月号はちょっと物足りないかもしれませんが、どうぞ、これにてご容赦お願いしたいと思います。

天見谷行人

2014年1月5日鑑賞

やられた！！まさかの傑作！

まさに、やられた！！である。まさか、年明け早々、こんな傑作に巡り会うとは思わなかった。観終わって、劇場のロビーに飾られていた、本作紹介のプレゼンボードを見つめた。そこに記された「監督 ジュゼッペ・トルナトーレ」の文字に向かって

「やってくれましたね、監督」とおもわずつぶやいてしまった。

衝撃の結末はどうぞ皆様、劇場で大いなる驚きをもって味わっていただきたい。ここまでうまく観客全員を騙し通せた、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の手腕に、僕は拍手を惜しまない。

本作を今年の映画初め、鑑賞初め、映画レビュー初めに選んだ自分を褒めたくなる。そんな高揚した気分だ。これほどの傑作を、いきなり年明け早々に鑑賞した興奮がまだ収まらない。

主人公の鑑定士、ヴァージル・オールドマンは、まさに”超”がつくほどの、世界一流の美術鑑定家である。富豪たちや著名な美術コレクター達が集まる、美術オークションの司会進行役を務める。これを競売人、オークショニア、と言うんだそうですね。初めて知りました。

まあ、美術に疎い僕なんかからすれば、なんでこんなモンに何千万、何億という値打ちがつくのか、よく分からないのだが、世界の超一流のオークションとなると、それこそ、何億円単位の取引が、当たり前のように整然、粛々と進められている。そういったオークションの成功の鍵を握るのがオークショニアの存在である。

主人公ヴァージルは、オークショニアの才能だけでも超一流なのだが、それ以上に彼は、際立った美術鑑定眼、天才的としか言いようのない「ホンモノ」と「ニセモノ」を見分ける才能と知識を持ち合わせているのである。

「これは17世紀に作られた有名な贋作ですね……。まあ、それなりの価値はございますが」などとサラリと鑑定してみせる。その贋作でさえ、当然時代を経た価値があるので、何千万円というお値段がつけられる。もし本物であれば、おそらく、その数十倍の価値だろう。彼の日常は、こういう、とんでもないお宝美術品と、四六時中つきあい続ける事で成立している。



そんな彼に一件の鑑定依頼が舞い込んだ。

依頼主は資産家の娘からだった。自分の古い屋敷にある、すべての家具調度品、美術品を鑑定し、良い条件で売り払ってほしいというのだ。彼は依頼主の屋敷を訪れる。しかし、奇妙な事に依頼主は姿を見せない。電話で聴いたのは、確かに若い娘の声だ。

時代を経た、ロココ調（でいいのかな？ 間違ったらゴメンしてね）の部屋。その壁の中から小さな声が聞こえる。依頼主は壁の中にいたのだ。しかし驚いた事に、若い女性依頼主は、その壁の中から絶対に出たくない、姿を見せたくないと言い張る。

やむ終えない。ヴァージルは資産の鑑定、および売却に関する説明や契約書へのサインなど、事務手続きをすべて壁越しに行うのである。

この謎めいた依頼主と屋敷、そして美術品オークションはどうなるのか？

この作品、一回観ただけでは、もったいない。



ぜひ、二度三度観て、その登場する美術品の数々を、じっくり味わいたいと思う。それだけでもこの映画を見る価値がある、と私は思う。

さらには音楽だ。

これがいい。

巨匠、エンニオ・モリコーネの音楽が正に絶品！！

映画を邪魔する事なく、さりげない風景画のように流れている。そこには自己顕示欲にまみれた作曲家の主張が一切ない。モリコーネの音楽は、いつの間にか、この謎めいた作品世界の中へ、われわれ観客を運んでゆく。それはまるで大河の流れに、ゆったりとたゆたう、船に乗り合わせたかのようなのである。

キャストिंगも、ほとんど究極とも言えるチョイスだ。主役のジェフリー・ラッシュがいいねえ。天才にありがちな我が儘さや、潔癖性、偏屈、それでいて物腰は優雅で紳士的。もちろん、自分の仕事と、社会的地位、それに自分しか持ち合わせていない才能に、大いなる自信を持っている。そういう人物像を見事に演じ上げた。

彼の商売の相方、ちょっとくせ者の美術商、ビリーにドナルド・サザーランド。この人もよかったねえ。

彼は天才鑑定士ヴァージルと組んで、オイシイ利ざや稼ぎをしているのである。なにせ世の中には、ヴァージルしか真贋を判定できない美術品なんてものが存在する。本物をあえて偽物と判定してもらってオークションに出品し、安値でビリーが競り落とす。その後、本物の値段でコレクターに売り渡すのだ。以前、僕は営業マンをやっていたとき「商売ってのは生まれ持ったセンスだなあ」と感じる時がよくあったが、まさにこういう抜群の商売センスを持った人物には、

とても素人は叶わないなと思わせる。

この映画の魅力は数少ない言葉では言い尽くせない。是非とも、あなたご自身の心の眼と感性で、この映画に潜む、深くて濃い、さまざまな要素を味わい尽くしてほしいと思う。その上で、私の映画レビューの”真贋”をご判断していただくのも一興かと思う。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 ジュゼッペ・トルナトーレ

主演 ジェフリー・ラッシュ、シルヴィア・フックス、
ドナルド・サザーランド

音楽 エンニオ・モリコーネ

製作 2013年 イタリア

上映時間 131分

予告編映像はこちら

http://www.youtube.com/watch?v=6oeE9w_w6Ak

少女は自転車にのって

2014年1月13日鑑賞

補助輪を外してはダメですか？

サウジアラビアという、全く未知の文化圏の映画ということで、大変興味がありました。しかも女性監督の作品。これはおもしろそうです。

お郷の宗教はイスラム教なんですね。アラブ圏では一般的なんですが、サウジの場合、特に厳しいようです。ウィキペディアで調べてみると、女性は外では絶対にスカーフをかぶり、顔を見せてはダメ！ 女性は車の運転もダメ！ ましてや、少女がジーンズをはいて、スカーフも被らないで、自転車に乗るなんて、とんでもない！！

そういうお国柄なんですね。



主人公のワジダ。彼女は男の子と一緒に遊ぶぐらい活発な10歳の女の子です。男女共学ではないので、当然女子校に通っています。クラスメイトといっしょに、足の爪にペディキュアを塗ってオシャレしてみたり、カッコいい男の子の写真や、ファッション雑誌なんかを見たりする。でも、もしこんなところが見つかったら、即、校長室に呼び出し。お説教部屋行きなのです。

とにかくこの国のメンタリティーは「男尊女卑」

女性は男に従順に従う事、そして徹底した貞操を求められます。

でも活発なワジダには、ささやかな夢がありました。

「女の私でも自転車に乗って走り回りたい」

そのため彼女は、すこしづつお小遣いを貯金しています。その姿が何ともいじらしいです。そんなとき、友達の男の子が自転車を持ってきてくれました。大喜びのワジダ。

「これで練習しなよ」

だけど一転、ワジダは泣き出します。

「こんなの自転車じゃない」

その自転車にはカッコわるい「補助輪」がついていたのです。泣きじゃくるワジダ。

「しょうがねえなあ」

男の子はしぶしぶ工具を使って補助輪を外しにかかります。

ギギギギ、カチャカチャ、ポロリ。

補助輪は外れました。

「ほら、外してやったよ、補助輪」男の子はワジダに見せます。とたんに大喜びのワジダ。

「これよ！ これが自転車なのよ！」

ワジダはさっそく自転車の練習に励むのですが、それがお母さんに見つかってしまい……。

ぼくはねえ、補助輪を外す、このシーン。これがこの映画の全てを語っていると思いました。とっても良いシーンでした。

サウジアラビアで女性が生きてゆくとはどういうことか？

それは男性と言う「補助輪をつけた自転車に一生乗っていなさい」ということなのです。

自転車はカーブになれば車体を傾けて、風を切って、走り抜けます。

それが自転車に乗る事の醍醐味ですね。吹き抜ける風が頬をなでる。何とも清々しい気持ちよさ。でも、補助輪をつけた自転車では、そんなこと出来るはずもない。補助輪を外さなければ、車体を傾ける事は出来ないのです。風を切って走り抜ける事も出来ないのです。



「私には欲しいものがある！」
愛らしく、したたかな闘いが
社会の壁を乗り越えてゆく。



映画館の設置が法律で禁じられている国サウジアラビアから、奇跡の傑作が誕生した！ ヴェネチア国際映画祭インターフィルム賞、ロッテルダム国際映画祭批評家連盟賞などを受賞、世界中の拍手に包まれた本作は、2014年アカデミー賞外国語映画賞サウジアラビア代表にも選出された。

それでも自転車代の800リヤルには程遠い。そんな時、学校で暗誦コンテストが行われることになった。優勝賞金は1000リヤル！のコーランだったが、ワジダは迷わず立候補、必死にコーランの練習を重ねるのだが...

本作は、そんなサウジアラビアの伝統や文化、女性の生き方に、一つのささやかな提案をしました。女性だって「補助輪を外した生き方」をする事を許してもらえないのでしょうか？ それはいけないことなのですか？

それをアピールした本作の監督は、女性監督なのです。もちろん、この作品、本国サウジアラビアで上映すれば大ブーイングを受ける恐れさえあります。

そこで本作のHPを見て驚愕しました。なんと、サウジアラビアには、そもそも映画館の設置が法律で認められていないそうです。

そんな過酷な状況の中、ハイファ・アル＝マンスール監督は、勇気を持って本作を作りました。その心意気にぼくは大きな拍手を送りたいと思います。あっぱれ！！

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆
- 美術 ☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ハイファ・アル＝マンスール
主演 ワアド・ムハンマド、リーム・アブドゥラ
製作 2012年 サウジアラビア
上映時間 97分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=ZOohaXdgx9k>

大脱出

2014年1月18日鑑賞

年寄りは一引込んで、なんて言わせないぜ！！

普段はハリウッド系アクション映画、大嫌いな僕も、本作は観に行ってしまった。何しろ、我らがシュワちゃんと、スタローン氏の共演。ハリウッドを代表する、二人のアクション大スターが共演する訳です。



大スターを大勢集めて、それこそ「天ぷらのかき揚げ」みたいな映画は時折見かけますが.....。そういう映画はご免被りたいです。

ちなみに僕は、天ぷらの中では、その、かき揚げが大好き(^□^)

まあ、人生は矛盾だらけなんでありませう。

この手の映画は、ご承知の通り、リラックスして、かき揚げならぬ、ポップコーンをポリポリやりながら気楽に観ましょう。それがアクション映画好きの流儀って言うものでしょうね。

ストーリーは至って簡単。

スタローン氏演じる脱獄のプロフェッショナル。もう、その技術は天才的。だからその特殊技能は、監獄を作る側、運営する側としては、とても価値がある訳です。

そこで、彼の技を生かして、新たに作った脱獄不可能と言われる監獄を、試しに脱獄してみてくださいませんか？ もちろん、とびきりの報酬を用意しよう。彼はその仕事を請け負いました。

「よし、それじゃ、仕事にかかろうか」と彼が準備しようとしたとたん、

一暗転一

気がついたとき、スタローン氏は既に監獄の中にいる、と言う、ワカリヤスイ状況設定。

鍛えられた肉体と知恵と勇気をフルに使って、この脱出不可能な監獄から彼は抜け出せるのでしょうか？



まあ、アクション映画、娯楽映画として、本作はとても良く出来ていると思いますよ。二人の大スターの美味しいところ、ちゃんと演出されてますし。

それに気がついたんですが、なにより、編集に違和感がないんですね。

僕がハリウッド系アクション映画が大嫌いな理由は.....

その① 0.5秒以下でカットをつなぐと言う事

その② 画面ブレブレの手持ちカメラの乱用

その③ CG,VFXに頼り過ぎ。

個人的な事ですが、ぼく「めまい持ち」なんですよ。

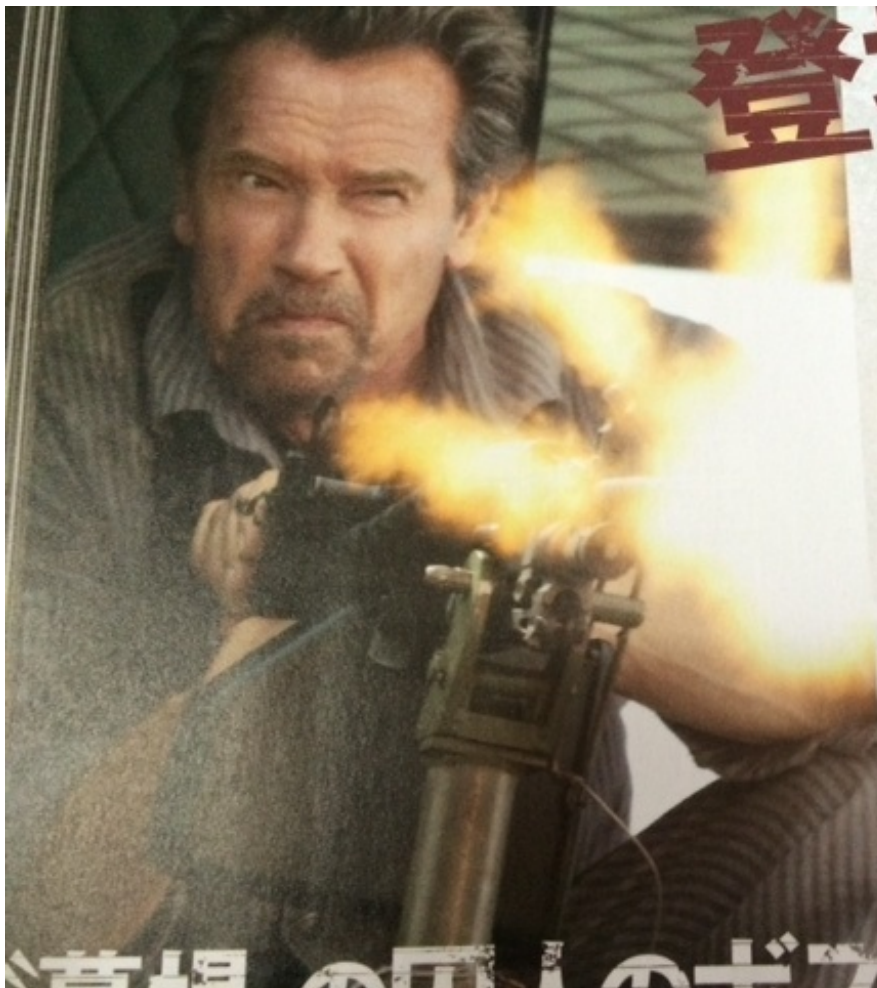
だもんで、あのデカイスクリーン画面が、0.5秒以下でパッパッパッと切り替わるなんて、もう観るに耐えないんです。

しかし、本作は意外にも「観るに耐え」ましたよ。

CG,VFXにしても、彼ら主役を引き立たせるために、適切に使ってますね。

相変わらず筋骨隆々のシュワちゃんとスタローン氏。いやあ～御両所、まだまだアクションスターとして第一線で頑張ってますなあ～。

登場人物



点のキャラクターは、監獄が海の上
本作の特徴は、監獄が海の上
に浮かぶタンカー内にあるとい
うこと。本マニュアルでは、ス
ケールのデカすぎる「墓場」のハ
イテクな管理体制を徹底解説。
さらに、プレスリンへと行き着
く「脱獄王の系譜」をたどると
共に、2大巨頭の軌跡を共通の
キーワードから追う。

監獄要塞「墓場」



警備員
ドレーク
(ヴィニー・ジョーンズ)
ホプスの右腕。表
をほとんど表に出
ず、力で四人を拵
えつけ、いざとい
ときはナイフを



医師
カイリー
(サム・ニール)

驚くべき事にこのお二人、66歳と67歳。

年寄りの冷や水なんて言わせないぞ、若い奴らには負けんぞ、という映画への意気込みがとっても伝わってきます。

なにより、このお二人の「アクション映画への熱い想い」そして映画を作る事そのものが「やっぱり好きなんだなあ〜」という雰囲気がスクリーンから伝わってきて、僕はとても好感が持てる作品なのでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆
- 美術 ☆☆☆☆
- 音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

- 監督 ミカエル・ハフストローム
- 主演 シルヴェスター・スタローン、

アーノルド・シュワルツェネッガー

製作 2013年 アメリカ

上映時間 116分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=43BvMRhv1uo>

教会を作った黒い肌の天使

子供の頃、日曜洋画劇場でこの作品を観た。ゴスペルソングを歌うシドニー・ポワチエ。力強く忘れられないそのメロディー。ミュージカルを思わせる様な、シスターたちとの合唱シーンが忘れられない。

まだ、子供だった僕の記憶に、そのメロディーはしっかりと刻み込まれた。いつかもう一度観てみたいとずっと思っていたら、何とある日偶然にもテレビ放映してくれた。僕はかじりつくようにして魅入ってしまった。放送してくれたテレビ局に、もう、感謝！感謝！である。

ところが、この名作はレンタルビデオ店ではなかなか見つからないのだ。全国のレンタルビデオ店の皆様、是非、本作品を置いて頂きたい。

＊＊これ以降は完全ネタバレをご容赦くださいませ。＊＊

車で旅を続ける黒人青年スミス。オーバーヒートした車に水を貰おうと、たまたま立ち寄った修道院。彼はそこで東ドイツからやって来た、英語も満足に喋れないシスターたちと教会を手作りするハメに陥る。

全く金にならない。食事も粗末。

最初はいやがっていた彼。しかし途中から教会という建物を造ってみたいくなってしまう。彼は腕のいい建設作業員だ。重機だって器用に動かせる。見よう見真似だが設計だってやる。

そんな彼に、ひとつでもいいから建物をいちから造ってみたい、というモチベーションがむくむくと持ち上がってきたのだ。だが修道女たちには金もなく、教会を建てる煉瓦さえ満足にない。やがて村の人々が、煉瓦や材木を持ち寄ってくれるようになる。村人たちだって教会が出来るのは楽しみなのだ。またそれを皆で作りたいかったのだ。

最初はどうしても一人で作りたい、というこだわりを持っていた黒人青年スミス。

そんな彼を木陰で見せ物の様に眺める、朴訥な村人たちの姿。それを真正面から捉えるカメラがまたいいんだなあ。

貧しい村はメキシコ系の移民たちで成り立っている。

ここでガソリンスタンド兼軽食堂を営むオヤジさんのキャラクターがとて面白いのだ。突き出たお腹は愛嬌があり、商売熱心。ちょっとおせっかいで、なおかつ心根は意外にやさしい。いい表情だなあ、この役者さん。

黒人青年スミスは、修道女たちと出会ってから粗末な食事ばかり。やっと日曜のミサで、おやじさんの軽食堂へ行く事が出来た。ここでの食堂のオヤジさんとのやり取りが何とも楽しい。

「とにかく腹ぺこなんだ、フレッシュジュースだ！ それにパンケーキを山盛り焼いてくれ！ 目玉焼きは5個だ！」と、もう、まさに待ちこがれていた様に矢継ぎ早に注文する黒人青年スミス。

だけど、ちょっとここで想像してみよう。

こんなにひもじい思いをして、修道女たちは今までずっと暮らして来ているのである。その現

実がいかに厳しいものなのかを。

やがてスミスは村人たちと共に力を合わせる事を学んでゆく。このあたりのストーリーの流れ、編集はとてもうまい。

紆余曲折の末、ついに教会は完成する。そこに十字架を建てる黒人青年スミス。教会を作ったという達成感。満足感。そして村人たちの笑顔。

彼は全てを村人たちと修道女たちに与え、自分は一銭の金も受け取らなかった。しかしそれ以上の喜びを得たに違いない。

彼は教会の完成を見届けながら、誰にも見つからない様に、ひっそりと村を去ってゆく。

そしてシスターは、去って行った彼に、神の意志と愛を感じるのである。

もしかするとあの黒い皮膚をした男は、正に神が遣わした天使だったのかもしれない、と。

何という見事なラストシーンだろうか。

この作品、実にテンポがよく、飽きさせる事なくストーリーが進む。二時間を切る作品の中にユーモアを交え、人種や移民と言ったデリケートな要素まで盛り込み、歌でも楽しませ、そして最後にとっておきの感動を味あわせてくれる。

この作品がなぜ観ていてほっと心休まる気がするのか？

それはラルフ・ネルソン監督の人間を観る眼差しが、性善説に基づいているからだ、僕は思う。人間が本来持っている善の部分、それを信じてみようじゃないか、という監督の姿勢が僕は好きだ。

この作品が作られたのは1963年。この時代、黒人差別は今から想像できないほど強烈だったろうし、アメリカは公民権運動で揺れていた時代だったと聞く。そしてになにより、ケネディ大統領が暗殺された年でもあるのだ。

時代はまさに混沌としていたのだ。

このような、危うい、不安な時代にこそ、人の心を癒し、「人間の善性」を信じ、表現してくれるような芸術がぜひとも必要なのだと思う。

「野のユリ」という言葉は聖書に出てくるそうだ。

「野のユリ」は何も求めない。

そして存在するだけで美しく尊い。

この作品自体が、正に混沌とした現代において必要とされる、一輪の「野のユリ」そのものなのではなかろうか。

どうかこの映画は末永く観続けられて欲しいと思う。

映画ファンのみならず、人間として大切にしたいと思わせる名作である。

最後に、黒人俳優初のアカデミー賞主演男優賞をこの作品で受賞した、主演のシドニー・ポワチエに敬意を表したい。

監督　　ラルフ・ネルソン

主演　　シドニー・ポワチエ、リリア・スカラ

製作　　1963年

上映時間 94分

予告編映像はこちら

https://www.youtube.com/watch?v=KMt3dvl_USE

映画に宛てたラブレター2014・2月号

<http://p.booklog.jp/book/81270>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81270>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81270>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ